

2025年7月6日（日）主日朝礼拝説教

『サウロの回心』井上隆晶牧師

使徒言行録9章3～9、15～19節、ルカによる福音書10章1～9節

①【神の光に照らされて変わる】

今日はパウロの回心についてお話ししましょう。彼は元の名をサウロといい、ユダヤ教の中の厳格なグループであるファリサイ派に属し、ガマリエルという有名な教師から律法を学び、その教えを忠実に守っていました。そんなパウロにとって、キリスト教の教えというのは、とうてい受け入れられるものではありませんでした。自分のことを神（又は神の子）だというイエスという預言者がいることや、どんな罪人でもこのイエスを信じれば、律法を守れなくても罪が赦され、神の国に受け入れられるというのは、神を冒瀆する教えであり、ユダヤ教の異端であって、絶対に許すことはできなかったのです。彼はとても熱心にキリスト教徒たちを迫害しました。

そんな彼がダマスコへ行く途中で、突然、天からの光に照らされて、地に倒れます。そしてキリストの声を聞きます。「サウル、サウルなぜ私を迫害するのか」（使徒9：4）。パウロがあなたはどなたですかと聞くと「私はあなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」（同9：5～6）と言われました。彼は目を開けますが、何も見えなくなっていました。そこから三日間、目は見えず、何も食べることもできませんでした。ここからパウロはまったく無力になり、沈黙します。自分の正しさというものがぜんぶ崩れ、自分というものが砕かれたのです。

●榎本保郎牧師は、「私たちの心に何かかたいものがあったり、自分というものがとけてなくなっていないのは、太陽の当たっていない霜柱のように、キリストの光が当たっていないからである。神は怒り狂うサウロに、そのような一つの聖なる体験をさせた。」と言っています。

私たちも同じです。神の道具、神を入れる器にされるためには、自分という者が砕かれなければなりません。そのために、神からの生きた光を心にあてることです。

②【アナニヤの召命について】

大伝道者パウロが生まれるために、どうしても欠かせない人物がアナニヤでした。彼は既にキリスト教徒として召されており、この時ダマスコに住んでいました。今でもダマスカスに行くと、このアナニヤの家があったであろうという場所の地下に、聖アナニヤ教会が建てられており、中庭には、サウロに洗礼を施すアナニヤの像があります。このアナニヤに神は幻の中で語ります。「立って、『直線通り』

と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。」(使徒 9：11)しかし、アナニヤは彼がキリスト教徒たちにどんなにひどい悪事を働いてきたかを聞いていますと、主に訴えると、主は「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」(使徒 9：15)と言います。そこでアナニヤは勇気を出して出かけてゆき、彼に洗礼を施したのです。神様の計画が実を結ぶためには、先にキリスト教徒として召された者の献身と忠実さが必要だということです。サウロがパウロとして生まれるために、アナニヤは先に召されたということです。私たちが先にキリスト教徒として召された意味も、誰かの救いのためなのです。一人の信仰者が生まれるために、多くの人の犠牲と祈りと信仰の決断があったことを感謝します。

③【召命について】

神様はなぜ、キリスト教の迫害者であったパウロを異邦人への使徒としてお選びになったのでしょうか。そこには神の深い計画がありました。パウロは手紙の中で「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた」(ガラテヤ 1：15～16)と語っていますし、預言者エレミヤも「母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」(エレミヤ 1：5)と、生まれる前からの神の選びがあることについて語っています。

すべての人には神のご計画というのがあるのであって、神はすべてを予知しておられるので、神の御用をするためにあらかじめ「ある人」を選び、母親の胎内にいるときから聖別されるのです。聖別というのは取り分ける、他のものと区別して置いておくということです。

●逢坂元吉郎はこう書いています。「パウロは、自分のような罪悪者が選ばれたということは、どうしても神の予め定め給うた所と考えざるをえないと信じた。…一人は運命づけられているものがあって、ある個人にとっても、何年かの間は、迷わざるを得ない墮落の期間がある。が、天使に定められている者は、途中で躓いて罪を犯すが、ついには神の御もとに来たらざるをえぬ定めを持っているのである。…すべて宗教的な人は生まれついているものであって、聖の根源はここにある。」

何となくわかる気がします。自分の人生を振り返っても、なぜ未熟児だったのに生きたのか、なぜ統一協会に行ったのか、すべて牧師にさせるためであったというのが分かります。

●また逢坂元吉郎はこんなことも書いています。「使命とか召命とかいう言葉は、

明治時代にはまだなくて、それ以後に出来たものである。使命とは、人の職分に関するものであって、未だこの世のものである。しかし召命とは、世が創られる前にある神の召しによるものであって、単に職分に関するものではなく、生まれてきた全体が神に召されているということである。すなわち召命とは、初めに定められた運命に帰ることであって、信者はここに来なければならぬ。かつては家柄と律法厳守と博学と健康を誇っていたサウロに、サウロ、サウロと呼ぶ天からの声が聞こえた。このように呼びかけられるキリストに召され、そのとりこになる者が信者である。われわれはこの厳粛な召命に応じなければならない。」

使命はこの世の中ですべき仕事を与えられているということで、この世だけのものですが、召命は永遠に続くものであって、キリストのものになり、永遠の命を受け継ぐ者になることなのです。

この世でいろんなことが出来なくても大したことではありません。この世のことを誇る人もいますが、私たちはキリストを誇ります。この世のことを上手に行うために召されたのではないからです。天の国では、この世のことをいくら上手にできても通用しません。天国では信仰がなければ通用しないのです。私はたとえこの世のことが出来なくても、キリストを語るために選ばれ、召されたのです。だからキリストを語り続けることをやめません。皆さんも自分がキリスト教徒として召された意味を考え、この厳粛な召命に応じましょう。